

受託団体名	NPO 団体 志リレーション Lab
-------	--------------------

## 事業実績報告書

### ①本事業の趣旨

特別支援教育が推進されたことにより、病気や障害等に応じた学習支援・自立支援が実施される機会が増えている。しかし、特別支援教育対象児の中には、この機会を得られていない、周囲に気づかれにくい児童生徒が少なからず存在している。例えば、発達障害傾向のボーダーラインの児童生徒や、難病等により長期入院中の児童生徒、心理的な要因により長期欠席せざるを得なくなった児童生徒等である。このように、病気や障害等により、標準的な教育制度ではドロップアウトする危険性が高い児童生徒（以下、ドロップアウト・リスク児）に対しては、一人ひとりの児童生徒等のニーズに応じた学習支援・自立支援を行うことが必要となる。

当NPO団体は、愛媛大学が文部科学省より委託を受けた事業の再委託先となり、ドロップアウト・リスク児一人ひとりに適した学習支援・自立支援を実施する体制を構築してきた。その過程で、①ドロップアウト・リスク児は、教育・学習の機会から長期離脱していることにより、所属校の学習進度から大きく取り残されているため、一人ひとりのニーズにあわせた学習支援が必要であること、②長期にわたり社会参加ができない状態にあるため、社会人基礎力（社会的マナーやコミュニケーション能力、感情やストレスのコントロール能力）にも遅れがみられることが多いことが明らかとなった。

同時に、ドロップアウト・リスク児に円滑に配慮を提供する前提として、①ドロップアウト・リスク児が、自らがおかれている困難状況を意識すること、②ドロップアウト・リスク児を取り巻く人的環境（保護者、教員、障害のない児童生徒等やその保護者）が、ドロップアウト・リスク児の個性・特性について理解すること、③それらの人的環境が、当該児童生徒の権利を保障する上で合理的配慮が必要不可欠であることを理解すること、等が必要であることもわかった。しかし、四国地方を含める地方都市においては、このようなドロップアウト・リスク児に関わる知識・技能が一般的に認知されていない現状がある。

また、全国的には、ドロップアウト・リスク児に対して多様な合理的配慮の提供が行われており、また多様なサービスが存在するが、これらの社会資源についても、地方都市では十分に情報が行き届いていないことが多い。

そこで、当NPO団体は、ドロップアウト・リスク児への支援について全国的には後進となる四国地方（愛媛県、香川県、徳島県）において、ドロップアウト・リスク児自身を含め、保護者、教員やその他の支援者、障害のない児童生徒等とその保護者を対象とした、理解啓発の講習会を開催した。当該講習会では、過去にはドロップアウト・リスク児であった発達障害等のある成人による講話と、多数のドロップアウト・リスク児の支援を経験している専門家による解説、及び両者の共同による体験型ワークショップを行い、ドロップアウト・リスク児に関する共感的理解を促進することを目的とした。

さらに、講習会後にアンケート調査を行った。また本事業によって得られた成果は、当該NPO団体が運営するホームページ等で公開した。

### ②実施内容の概要

本事業では、ドロップアウト・リスク児への共感的理解を促進することを目的として、LDのある南雲明彦氏、AD/HDのあるあーさ氏に、発達障害者としての経験をもとに講演会を実施した。講演会実施前に、ホームページ、チラシ、ポスターによる講演会案内を行った。

8月に、愛媛県、香川県、徳島県で、発達障害児者、その家族、支援者（学校教員等）を対象とした講演会を開催した。また、香川県、徳島県では、参加者に対して事前アンケートを実施し、参加者が聞きたい内容をテーマとした対談も行った。講演会終了後、参加者にアンケートを実施し、事業評価を行った。

9月に、専門家（研究者、保健医療福祉専門職）も数多く参加する日本特殊教育学会で、自主シ

ンポジウムを企画し、当事者・保護者・支援者・教員・専門家の立場から話題提供を行い、参加した専門家等への理解啓発を図った。

2月に、日本LD学会での自主シンポジウムの代わりに、南雲明彦氏、あーさ氏による自らの経験に基づいた教材や学習ツールについての特別講演会を開催した。なお、障害児者の情報・通信の開発者が数多く参加する福祉情報工学研究会（WIT）と同日程で開催したため、専門家も含む様々な立場の方が参加する場となった。講演会終了後、アンケートを実施し、事業評価を行った。

なお、講演会に参加できなかった方々への理解啓発として、ホームページだけでなく、成果報告書を作成した。

これまでの成果と今後の課題について、国立大学愛媛大学で成果報告会を実施した。また、連絡協議会を開設し、啓発活動の打ち合わせ、報告会の計2回実施した。

### ③実施成果の概要

南雲明彦氏とあーさ氏の講演会には、愛媛会場71名、香川会場30名、徳島会場51名の計152名が参加し、特別講演会には、54名が参加した。講演会後のアンケートでは、9割の参加者が講演会に対する満足度も活用度も高かったと答えており、「視野が広がった」「また聞きたい」等の高評価を得ることができた。発達障害者の話を直接聞くことで、発達障害のある児童生徒、その家族、支援者（学校教員等）等が、発達障害について共感的理解を得ることができた。この講演会を通して、当団体の教育相談につながったケースや当事者会の場につながったケースもあった。また、発達障害のある引きこもりの生徒や不登校の生徒が参加したことで、意識の変化が見られた。

当団体の活動を知っていただくことによって、これまでサポート、ケアが行き届かなかった発達障害及びその傾向がある児者とその家族の方々にも支援の可能性が拡がり、それぞれが抱える問題を解決する手助けにつながった。

また、日本特殊教育学会での自主シンポジウムでは、地方都市における理解啓発のあり方、当事者のニーズに寄り添った合理的配慮の提供のあり方について、全国各地からの参加者とともに議論しあい、地方での理解啓発の難しさがある一方で、地方ならではの工夫も聞くことができた。ほとんどの参加者が突破口を模索中である様子であったが、学会を通して、全国各地の方々との情報交換を行えるつながりができた。

### ④課題と今後の方策

講演会の参加者からは、肯定的な反応とともに、継続した啓発活動の必要性について要望が挙げられていた。今回は事前申し込みという形で、興味のある人が参加していたが、「学校での啓発講義をしてもらいたい、自分の周りの人にも伝えたい」など、参加された方自身が、自分以外にどう伝えたら良いか悩んでいるという感想がいくつかあった。また、特殊教育学会でも地方都市における理解啓発が課題であった。今年度、中四国地区の中で講演会を開催できていない県があったため、開催地区を拡充して実施する予定である。

また、今回は、ドロップアウト・リスク児への理解啓発を重点的に行ったが、具体的な関わり方（障害特性等に応じた支援・指導の方法）について知りたいという意見も多くあった。特に、思春期以降の関わり方や合理的配慮の具体的な提供内容についてだ。ドロップアウト・リスク児が、健全に成長し、社会においてキャリアを形成するためには、ドロップアウト・リスク児が自らの個性・特性に応じた主体的な学びを促進する方法・自らの困難を他者に説明し合理的配慮の提供を求める方法を習得する必要がある。こういったスキルの向上を目指した支援・指導が求められている。

当NPO団体では、ドロップアウト・リスク児本人、及び通級による指導担当教員等が、こうしたスキルの向上を図る方法を理解するための講習会と体験型ワークショップの実施を行う予定である。